

(川内市中福良町西ノ平)

位置と環境

隈之城川が中央を流れる平野部へ突出する標高20~30mの南向き台地の先端近くにある。

調査の経緯

国道3号線隈之城バイパス建設に伴って昭和55年(1980)から57年にかけて発掘調査が行われた。

遺構と遺物

旧石器時代は、剥片尖頭器・台形石器・細石刃核などが出土している。細石刃核は、南九州独特の加治屋園タイプで、ここがこのタイプの西限である。

縄文時代の土器は、手向山式・塞ノ神B式・南福寺式・出水式・北久根山式・黒川式土器などの早期から晩期まで多種のものが出土しているが、量は少ない。石器には、石鏃・石匙・局部磨製石斧・敲石などが出土し、晩期のものと思われる軽石製石偶も出土している。

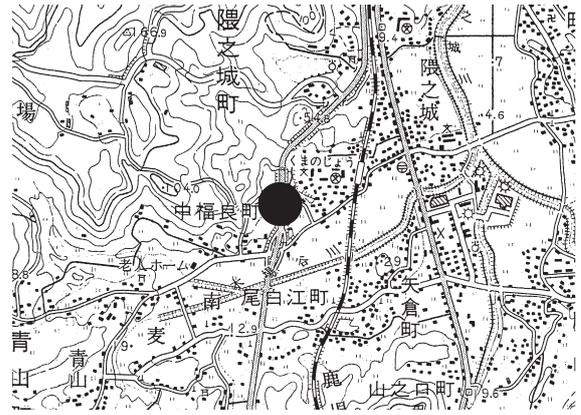
古墳時代は、出土の量が少ないが、土師器・須恵器などが出土し、複合口縁や線刻のある壺形土器などは4世紀から7世紀までの土器を含んでいる。

平安時代から鎌倉時代にかけては、隣接している成岡遺跡とともに古代薩摩郡の重要な地域と考えられる多くの遺構・遺物を発見した。

平安時代は掘立柱建物跡・土坑・溝・道などが発見されており、建物はその方向から大きく前期と後期に分けられる。前期のものは5棟が確認されているが、これも又切り合っていることから2期に分けられる。後期のものは、4棟が確認されており、こ

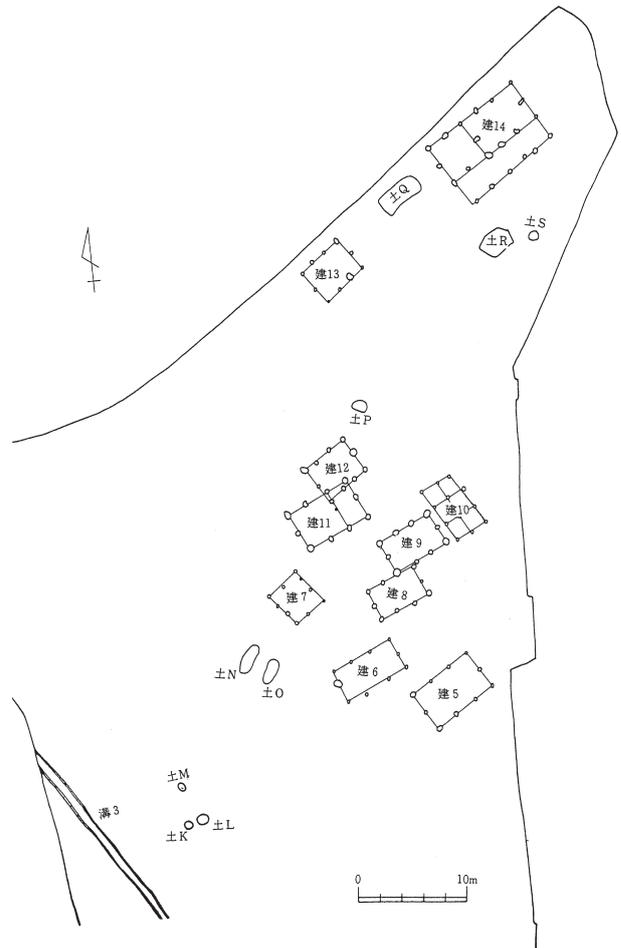


写真1 北側全景



第1図 西ノ平遺跡の位置

のうち1棟は倉庫である。このほかにも多くの柱穴が検出されているが、まだ多くの建物があったようである。土坑には、楕円形・円形のもの、あるいは不定形の形状のものがああり、このなかには直径2.85m, 短径1m, 深さ1.85mの大きなものもある。これは規模・構造や、隣接して2基あることからトイ



第2図 北半の遺構配置図

レの可能性も考えられる。

土師器・黒色土器・須恵器などには多くの器種が見られる。これらとともに

硯・墨書土器・刻書土器陶器・焼塩土器・青銅製帯金具・開元通寶等の古銭など一般の村落ではみられないようなものが多く出土している。墨書土器・刻書土器は、百点を越えており、そのなかでは「作」が多く43点出ている。このほかに「日」

・「高」・「子」・「一心」・「太舎」などがある。

鎌倉時代は、掘立柱建物跡・土坑・溝・祭祀場などが発見されている。掘立柱建物跡は、4棟あり、これらのうち3棟には礎板石・柱痕跡を認めた。1棟は倉庫である。中世の火葬場と思われる遺構があり、骨破片とともに洪武通寶7・青磁碗などが出土している。座位の墓も2基あり、古銭が副葬されている。

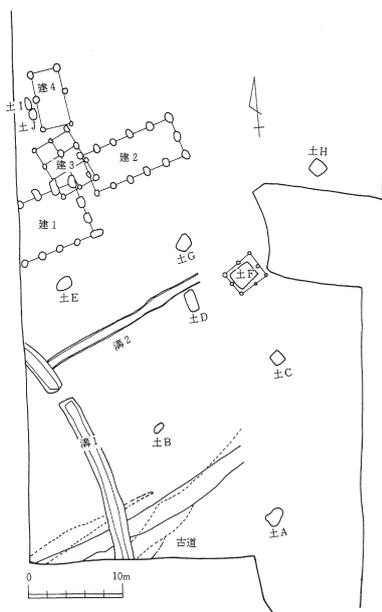
江戸時代中頃（18世紀中葉～終末）は、屋敷跡と、それに付随する道路・墓などがある。建物は、底に礎板石のある掘立柱建物跡が6棟見つかっているが、切り合っており、建替えのあったことがうかがえる。まわりにかまど跡・トイレなどもある。土壙墓は、6基が検出され、6～7枚の寛永通寶や木製の数珠



写真2 地鎮具・磁器・緑釉



写真3 鎌倉時代の建物



第3図 南半の遺構配置図

が副葬されている。

特徴

- ・旧石器時代から近代までは、連綿と長期にわたる複合遺跡である。
- ・平安時代の建物群は、出土品や、『山内文書』に書かれた内容などから考えて薩摩郡の郡役所跡である可能性が高い。そうであるとすれば、調査地点は役所跡の西端付近にあたり、さらに東へ延びるものと考えられる。
- ・鎌倉時代の建物跡群は、建物規模や、『山内文書』に書かれた内容などから考えて薩摩郡の郡司の居住地の可能性がある。中世の支配者層の居住地の様相を知ることができ、その終了時期が想定出来る貴重な遺跡である。
- ・江戸時代庶民層の屋敷の調査例は少なく貴重である。また、墓石に年代が記されており、時代が限定されることも、家族構成・薩摩焼の編年をする上に貴重である。

資料の所在

出土遺物は、県立埋蔵文化財センターに保管されている。

参考文献

鹿児島県教育委員会1983「成岡遺跡・西ノ平遺跡・上ノ原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』28

(池畑耕一)